

成田孟氏を偲んで

成田孟君を悼む

核データセンター O. B.

五十嵐 信一



核データセンターの柴田恵一君から電話で成田君の急逝を知らされ、あまりに突然で全く信じられない思いであった。奥さんと旅行中であったとのことで、知らない所での発病のために、救急車の手配も病院を探すことも俣ならなかったと聞き、何とも言い様のない痛ましさを覚えた。確か、昭和19年生まれだから、まだ53か4である。遣り残したこと、遣りたかったこともまだまだ多かったことと思う。早過ぎる逝きかたと言わざるを得ない。

成田君が原研の計算センターから核データセンターの前身であった核データ研究室に移ってきたのは1970年頃ではなかったかと思う。まだ西村和明さんが室長の頃で、私と中川庸雄君だけの時代で、居室も核物理第1研究室の建屋にあった。成田君には計算機を使う専門家として核データ関係の種々な計算機プログラム整備の仕事を期待し、成田君もシグマ委員会の要請を含めて、多くの仕事に携わり、期待に応えた。特に、1980年頃からは田村務さんのグループに協力して、ENSDF関係の仕事を担当するようになった。その他、Wapstra-Audiなどのmass-excess-tableを使えるように変換するなどの仕事も担当した。私自身もWRENDA関連の仕事を手伝ってもらったことがあり、また、核反応のQ値としきい値の表を作る際にも助けてもらった思い出がある。

成田君が核データ研究室に来て間もない頃、成田君の奥さん(当時はまだお嬢さん)は大学を出て小学校の先生として就職するまでの少しの期間、当時の核物理第1研究室

の事務を手伝うアルバイトに来ておられた。確か、核データ研究室の事務も同じ人が担当していたので、奥さんも我々の事務を扱い、自然と顔馴染みになっていた。これがお二人の出会いだったのであるが、奥さんはすぐ就職されてしまったので、私は自然と忘れてしまっていた。お二人が交際をされていることなどは当然のことながら全く知らなかった。それから2年くらいたったであろうか、お二人から仲人の大役を頼まれることになったのである。同郷のよしみと言うこともあったのであろうが、何れにしても私にとっては初めての仲人役で、大変光栄であり、忘れられない思い出であった。想えば、あれから20数年が過ぎた。お二人の一粒種である裕君は現在大学生で、成田君そっくりの風貌である。父親としての期待も楽しみも大きかったろうし、思い残しも多かつたらうと思うと、本当に残念であり、哀惜の念に堪えない。

成田君はどちらかと言うと、あまり人付き合いが良い方ではなかったと思う。東北人にありがちなぶっきらぼうさで、大分損をしたのではなかろうか。しかし、本当は大変親切な人柄で、言葉は少々乱暴であったが、面倒見の良い、優しさがあった。何時だったか、核データセンターの室内旅行があり、四万温泉に行ったことがあった。私は二人の息子を連れて行ったのであるが、長男が小学校の2年生ぐらいで、次男は未だ学齢前であった。成田君は長男とキャッチボールをするなど、私の二人の息子の面倒を良く見てくれて、大変有り難かったことを覚えている。また、核データ研究会などの折りには進んで裏方の役をやり、良く会の進行を助けていた。

この様な成田君が平成になってから手術をするような循環系の病に犯されたのはどう言う因果なのであろうか。病院側の不手際で二度も手術をすることになったのも不幸なことであった。退院後は健康に注意して良く節制していたようであるが、それでもついに病魔には勝てなかった。奥さんの話では、パソコン通信で死後の身の処し方などを通信仲間と語り合っていたそうである。病気に対する不安が常にあり、色々な想いがそのような語り合いを必要としたのであろう。その心情を想うと本当に胸が痛む。

核データセンターでは貴重な人材を失い、彼の仕事を埋め合わせることにご苦労されることであろうが、彼の鎮魂のためにも皆で頑張ってくださいと思う。成田君のご冥福を祈ると共に、核データ活動の一層の発展を願って止まない。